

會員よりのたより

南十字星その他

拜啓 曆上梅雨の候、過日は神戸にて「ジャバと天文學」と題する御話、誠に興味深く拜聴いたしました。

(一) 近頃「南十字星」といふ言葉が南方派遣の皇軍將士の便りの中に、或は報導戰士の筆にのる様ですが、それにつけても「天界」七月號に載せられております野尻さんの「神武の劍星」の文面白く、興味深く讀了した次第です。別紙、添附しましたのは「モダン日本」(昭和十七年五月號)の内にありました南十字星と言ふ小文であります、南方航行者にとつて如何に南十字星が印象深きものであるかと言ふ事が判ります。

(二) 又、別の切抜は、大阪朝日昭和十七年六月十三日の夕刊に現はれたもので、天文學者(獨逸人)とありますが、この方は、先生のお話中にあつた様に思ひますが、如何ですか?

(三) 歌にあらはれた星や、俳句に現はれた星は、古來多くあり、

明月や池をめぐりて夜もすがら

等はポピュラなものであります、頃日

この吾も××も共に死ぬるてふ彗星も見ず今日も暮れしか

(水上瀧太郎全集第八卷に明治四十三年の作として所載)

といふのを發見して、過日先生のお話中にありました先生高等學校御在學中の出來事をこれ又異つた目と異つたセンスをもつて彗星を見た例として、面白さを見出しました。

右駄辯一くさり失禮しました。敬具

昭和十七年六月十九日朝

神戸 桐山 一雄

臺北支部便り

★日蝕に關する放送と講演

1941年九月3日、窪川會長は招聘されて午前は臺北一高女、午後は臺北二高女で日蝕に關する通俗講演會を開き、生徒一同に“科學する心”を深めさせた、同17日夜、吉村昌久氏は臺日樓上で催された臺灣山岳會例會席上に於て、山岳人の爲の來る日蝕を中心とした趣味談をなされた。

J. F. A. K. の特別プログラムに呼應して、8日夜、東方氏“日蝕に對する傳説と慣習”、18日夜、堀川氏“肉眼日蝕觀測に就て”、19日夜、和泉氏“太陽と月”、25日夜、吉村氏“秋の星空”——四會員による放送が行はれた。

★日蝕協議會

役員のみでの打合せは幾度となく開かれたが、いよいよ切迫した、九月18日夜、公會堂二階に於て、O. A. A. 遠征隊の一部を迎へて、最後の協議を行ふ。交通不便の爲、富貴角行きの人數を限定する事、最悪の場合まで考慮して、一同二十餘名憂慮の中にも張切る。

★山本博士を迎ふ

九月20日、來臺の山本一清博士を吉村氏は基隆へ出迎へ、公會堂なる本陣へ御案内、小憩の後、放送協會の車で富貴角へ直行された。

★富貴角日蝕觀測

九月20日、逕信部提供のバス二臺に分乗して富貴角燈臺官舎へ向ふ。當夜は座談會に夜の更けるのを忘れる。官舎の全部を使用しても收容出來ぬ爲、石門へ泊らされた人もあり、燈臺の塔内で寝た人もあつた。

翌、當日、恵まれぬ条件の中一同奮戦、豫想以上の好成績を上げる。觀測後、即時、燈臺にサヨナラする。歸途のバスは故障續出、降りて押す事數を知らず、北投邊りの路で眠たり、忘れられぬ印象を受け、22日三時家に着く。

★日蝕を語る會

九月22日夜、息をつく間もなく、山本博士を圍んで、公會堂二階中集會室にて開催。席上博士は“日蝕より來たる人生觀”“日本天文學振興論”を一時間餘に亘る熱辯を振はれ、五十餘名の參會者に深い感銘を與へた。23時散會。

★“火星と月”觀望會

十月5日夜、於公會堂ドーム内。夕方頃に降つた雨の爲、來會者十名に足らぬが、和氣霽々に、宇宙の神秘を滿喫して散會。

★十一月例會

十一月21日、於公會堂一階廣間。出席者十數名。上海で開かれた東亞氣象會議の臺灣代表として行かれた窪川會長の旅行土産話に興味の耳を傾ける。來會者には好個の土産“蘇州天文圖”の複寫が配られた。

★「展覽會」初打合せ

十二月12日、17時、新公園協和會館に於て、窪川會長、吉村氏、和泉氏、細谷氏、小生とで天文思想普及と日蝕報告を目的とする展覽會開催に付て、諸具體案を協議した。臺灣最初の企てとしても、社會を啓蒙する遠大な希望に各々意氣昂揚す。

★新入會員情勢

16年度後半に於ける新入會員は四十五名で次の如くです。

男子三十七名（内地五名、地方四名） 女子 八名（地方一名）

（蔡章獻誌）